

インド（ディマプール、コヒマ、インパール）戦跡研修および慰霊の旅

多賀城市郷友会 阿部 勝雄

この研修ではディマプール、コヒマ、インパールと日本軍第15軍が進軍した逆方向からの研修となりました。

平成31年1月28日（月）

ディマプールは援蒋ルートの中継点の一つであり、コヒマ、インパールへの英軍補給兵站基地であった。その場所は現在、警察署の敷地になっている。

日本軍は、ディマプールに英軍補給兵站基地があることには、気付いていなかった。英軍第14軍司令官スリム中将は、英軍の補給兵站基地を日本軍が占領したなら、戦況が変わったろうといっている。

ディマプールに最も近くまで進出した（第138連隊第6中隊高田中隊）ズブザの旧橋を確認する。

1月29日（火）

コヒマ旧英軍病院跡を見て、イヌ高地にある激戦地テニスコート跡で黙とうする。イヌ高地（標高4738m）主陣地跡（現在はナガランド州知事公舎になっている）。特別に許可を得て敷地内に入場し戦没者に黙とうする。



イヌ高地にて黙祷

アトラス教会（アズラ高地、激戦地）に寄る。

キサマ戦争博物館見学（ここには、日本軍と英軍の武器写真や戦場の模型などが展示してある）。

ギグマ村（佐藤村ともよばれていた。ここに第31師団（烈）佐藤師団長が3ヵ月滞在していた

住居跡を確認) で当時 18 歳であった 93 歳の老人に当時の様子を話していただいた。



佐藤中将滞在の住宅

老人がそのとき日本兵に教わった歌「鳩ぼっぼ」を皆で歌い、大変喜んでいただきました。コヒマ博物館英戦車（この戦車はカナダ製）を見る。

1月30日（水）

ミッション旧橋を確認（本田大隊が占領爆破、3ヵ月後に撤退）。ミッション日本野戦病院跡を確認し、ミッション墓地で慰霊黙とう。

カングラトンビ英軍補給所跡（武器などの修理、整備する所で、おもに従事していた人は、軍属が多かった）。

セング村旧橋を確認（第15師団67連隊第3大隊本多挺身隊が占領）。

31日にインパールではストライキをするということになり、夕方急遽ロトパチンで慰霊祭を斉行する。

1月31日（木）

午前中のストライキのため、外出禁止令が出され行動不可能。午後は特別許可を得て、マハラジャ旧王宮を訪問（王宮内にある英軍スリム中将住居跡確認）。

2月1日（金）

ピシエンプール、カサール街道に旧日本軍建設の吊り橋（第33師団工兵第33連隊建設と思われる）。またピシエンプールでは、日本軍が使用していた井戸があった（現在も使用されている）。再度30日に行ったロトパチンの「インド記念公園」、戦友ならびにご遺族で建てられた「インパール記念公園」の慰霊碑で黙とうする。

またここは、別名レッドヒルといわれ日本兵約500名の戦死者を出した激戦地でもある。市内の戦争博物館を見学してこの戦跡巡霊慰霊の旅は終了した。

この研修で特に印象に残ったことは、日本軍将兵の八紘一宇の理念のもと植民地解放（インド独立＝チャンドラ・ボース率いるインド国民軍の参加）のための戦いでもあったこと。

次に、日英両軍の戦略・戦術思想の相違と精強な日本軍兵士の勇戦敢闘である。長躯約400^{キロ}、標高約3千^{メートル}のアラカン山系を約30^{キロ}の装備を背負い、踏破し、第31師団（烈）は昭和19年4月6日にはコヒマを占領し、第15師団（祭）、第33師団（弓）も4月中旬には、インパールを包囲する態勢が整い、作戦発動の3月8日から約4週間にて作戦目的である「戦略急襲」、すなわち徹頭徹尾急襲により敵を包囲し敗退させようとする態勢をとるに至った。その成果は、目を見張るものがある。しかしながら航空優勢かつ空輸を主体とする兵站、戦車、火砲の重装備を有する英印軍を中心とする連合軍の「円筒陣地」との戦い、またスリム中将の、「日本軍をインパール付近に誘致導入し、日本軍の兵站線の伸びきった場所での決戦戦略」に見事に嵌まった我に利あらず、雨期の到来も有り、7月5日作戦は中止された。

インパール作戦に約8万5千名の日本軍将兵が従事し、そのうち約3万名の方々が戦闘により、またマラリア、赤痢、コレラなどの病におかされ劣悪な環境のもと、極度の疲労や飢餓で帰らぬ人となりました。また三人の師団長が罷免、更迭で戦場を去ったのも前代未聞のことでした。

最後に「日本のため、日本を思い」亡くなったご英霊にたいしまして深くご冥福をお祈り申し上げますとともに心から哀悼の意を表します。